年間選者賞（令和三年七月号～令和四年六月号）

黒岩剛仁選

山本陽子

（令和三年十月号）

梅雨入りの前に植ゑにし一苗の白苦瓜の花咲き初めつ

こゆるぎの磯野フネ女の年齢に追ひつきにけり赤紫蘇を煮る

追ひつけぬ心もて聞くこの夏の一番蝉のこゑのひたむき

中生代半ばの海の響きもつ名の眠剤を服し寝に就く

カイロスの時間の中に在る人の中にやとこそ思ひ瞑らめ

よもすがら身動（みじろ）き伏せる私に撫でよと頭（づ）より迫り来る猫

眠れざる夜昼を経て来る夜のくづるるやうなねむりをねむる

●作者の言葉

年間選者賞を賜り、感謝申し上げます。五年ほど歌を詠みませんでした。再開したものの、言葉が湧かず、苦吟しました。折しも開かれたリモート歌会への参加を機に、歌友と評の評まで言葉を交わすことができ、場や仲間があることと、しみじみ有難いと感じました。欠詠せぬよう努めようと思いました。

毎月一生懸命八首を作ると、毎月一生懸命選者が読んで下さいます。心から感謝申し上げます。賞は、授けて下さった選者黒岩さまからの励ましと受け止め、寡作なりに、末永く詠み続けていこうと思います。

●選者の言葉

昨年七月号～本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四三人。複数回選んだのは、廣間菜月、佐坂恵子、山本陽子、三浦政博、島田節子の五名（三浦さんは、昨年も）だった。その中の、若い廣間作や先月選んだばかりの島田作に加え、芍薬を歌った昨年八月号の清水あかね作など大いに悩んだのだが、結果としては、上に掲げたごとく、昨年十月号の山本陽子作を年間選者賞とした。

この一連は、季節感たっぷりに白苦瓜の花が咲き始めたことから歌い起こし、眠剤の助けを借りて眠りに就くまでを詠んでいるのだが、「こゆるぎの磯」からサザエさんの「磯野フネ」へ繋げるなど、作者の技も感じさせられた。